

幼児期のしつけ内容に関する調査研究

——高松地域を中心として——

讃 岐 幸 治

渡辺陽子(共同研究者)

はじめに

本論は、幼児期におけるしつけの内容に、実態調査を通して、検討をくわえたものである。第1に、家庭で幼児をしつける場合、どんな内容に重点をおいてしつけているか。第2に、家庭でしつける方がいいとする領域はどんなもので、幼稚園、保育所でしつけてもらった方がいいとする領域はどんなものか。第3に、家庭でのしつけと幼稚園・保育所でのしつけとの間にズレが生じることはないか。ズレが生じるのはどんな領域に多いか。第4に、幼児はどの程度の生活習慣を実際に身につけているであろうか。そして最後に、家庭で重点をおいてしつけている領域と幼児が実際にできる行動とは、どんな関連をなしているか。われわれが行なった調査は、しつけに関する全領域を取扱っているが、ここがは、この5つの問題に焦点を合わせて、検討をくわえることにしたい。

手 続 き

(1)調査法 質問紙法による。

(2)調査期日 昭和45年10月上旬～下旬

(3)調査対象 香川県高松地域の幼稚園と保育所(園)とから、それぞれ公立2園、私立2園づつの計8園を選出した。そしてそれぞれの園のなかから5才児の母親50名、6才児の母親50名の計100名づつをアトランダムに選出した。こうして選出した計800名が調査対象である。調査対象の内訳および回収率は、第1表の通りである。各幼稚園、保育所を通して配布、回収したため、予想通りの高い回収率81.9%を得ることができた。本調査で直接分析の対象とするのは、回収されたこの655人である。つぎにこの655人の社会的背景を考察してみよう。

第1表 調査対象の内訳と回収率

回収 対象	回収数 配布数	回収率
公立幼稚園	$\frac{171}{200}$	85.5%
私立幼稚園	$\frac{165}{200}$	82.5
幼稚園	$\frac{336}{400}$	84.0
公立保育所	$\frac{170}{200}$	85.0
私立保育所	$\frac{149}{200}$	74.5
保育所	$\frac{319}{400}$	79.8
全 体	$\frac{319}{400}$	81.9

調査対象の社会的背景

世帯主の職業からみてみよう。第2表にみるように、世帯主の職業は、圧倒的に会社員が多く、全体の43.5%を占めている。つづいて農業、商業がそれぞれ12.4%づつ、公務員の10.4%となっている。

第2表 世帯主の職業

	農 業	商 業	会社員	公務員	サービス*	その他	D.K	計
人 数	81	81	285	68	33	78	29	655
%	12.4	12.4	43.5	10.4	5.0	11.9	4.4	100

ここで勤め人である会社員と公務員をあわせてみると、53.9%となり、これら二つで全体の半数以上を占めている。世帯主（本調査では殆んど全て幼児の父親にあたる）の半数以上が、家族とは離れた職場で働いているということである。幼児の側からみると、父親の職業（働いている姿）に直接接する機会がなく、時には父親はただ「夕方帰ってくるお客さま」としての意味しかもたないものが、半数以上いることになる。このことが、幼児のしつけにとって、どういう意味をもつか、後でもう一度考察することにする。

それでは、直接の調査対象である母親は、いつもどんな仕事をしているであろうか。第3表にみるように、家事のみ専念して、働いていない母親は、全体としては概して少なく29.6%である。残りの母親は家庭の内で、あるいは外で、何らかの仕事をもち、働いている。勤め人として働いている母親が23.5%、家業の手伝いが23.4%、内職している母親が15.7%である。そして家計の全部を支えている母親が655人中35人もいる。一般に、母親に対して《三食昼寝付き》と酷評されているが、現実には母親は家事のほかに家計も援助していかなければならない多忙な状況下におかれているといえる。

第3表 母親の仕事の度合

	幼 稚 園 郡	保 育 所 群	計
家業の手伝い	71 (21.1%)	82 (25.7%)	153 (23.4%)
内 職	44 (13.1)	59 (18.5)	103 (15.7)
勤 め	48 (14.3)	106 (33.2)	154 (23.5)
家計の全支持	20 (6.0)	15 (4.7)	35 (5.3)
家 事 専 念	143 (42.5)	51 (16.0)	194 (29.6)
D . K	10 (3.0)	6 (1.9)	16 (2.5)
計	366 (100.0)	319 (100.0)	655 (100.0)

幼稚園に子どもを出している母親（以後幼稚園群と呼ぶ）と保育所に子どもを出している母親（以後保育所群と呼ぶ）とを比較してみよう。どういう相違がみられるであろうか。幼稚園群においては、家事専念が4割以上を占め、家業の手伝い21.0%，内職13.1%となっている。いつも家庭にいる母親が7割以上いることになる。これに対して保育所群は対照的である。保育所群においては、勤め人として働きにいつている母親33.2%が最も多い。家事専念の母親は、幼稚園群の半分以上の16.0%しかいない。保育所群は幼稚園群にくらべてかなり忙しい状態にある。

家族構成はどうなっているだろうか。第4表にみるように、4人家族が46.0%を占めている。また第5表の子どものきょうだい構成にみるように、一人っ子は15%，3人以上の子どもを持っているのは7%に過ぎず、大部分が子どもは二人である。そして祖父母と同居していないと答えたものは64.7%いる。こうした家族構成からみると、この調査対象家族の場合にも、現代の家族型態の代表的なものと考えられている、父母と子ども二人からなる《核家族化》への傾向の一面がうかがえる。

第4表 家族人数

	幼稚園群	保育所群	計
3 人	11.1%	14.7%	12.8%
4 人	49.4	42.3	46.0
5 人	18.6	20.4	19.5
6人以上	20.9	21.6	21.2
D. K.	0	1.0	0.5
計 (実数)	100.0 (336)	100.0 (319)	100.0 (655)

第5表 子どもの人数

	幼稚園群	保育所群	計
一 人	13.1%	16.9%	15.0%
二 人	77.5	72.3	75.0
三人以上	8.1	6.0	7.0
D. K	1.3	4.8	3.0
計 (実数)	100.0 (336)	100.0 (319)	100.0 (655)

第6表 祖父母と同居の有無

	幼稚園群	保育所群	計
祖父母共同居	20.0%	16.6%	18.5%
祖父同居	2.1	3.8	2.9
祖母同居	10.7	15.4	12.8
祖父・母と同居していない	66.1	63.0	64.7
D. K	1.1	1.2	1.1
計 (実数)	100.0 (336)	100.0 (336)	100.0 (655)

最後に母親の年齢がどうなっているかをみておこう。第7表の母親の年齢構成にみるよ

第7表 母親の年齢

年 令	21～25才	26～30才	31～35才	36才以上	D. K	計
% (実数)	0.9 (6)	40.0 (260)	42.6 (279)	16.0 (105)	0.5 (5)	100.0 (655)

うに、母親の年齢は26才から30才までに40％、31才から35才までに42.6％を占めている。つまり20代後半から30代前半にかけて8割以上が集中している。若い年齢層にある母親であるといえる。

以上述べてきた調査対象の社会的背景を要約すると、被調査者の特性は、世帯主の職業の大半は勤め（会社員、公務員）で、子ども二人を持ち、自らも勤めにでたり家業の手伝いをしたりしている26才から35才までを中心とした母親であるとみることができよう。

調査結果および考察

しつけの重点のおき方

家庭ではどんな内容のものを幼児にしつけようとしているだろうか。またいろいろな内容のしつけのうち、どういう内容のものに重点をおいているだろうか。まずしつけの内容およびしつけの重点のおき方に焦点を合わせて、考察してみることにする。

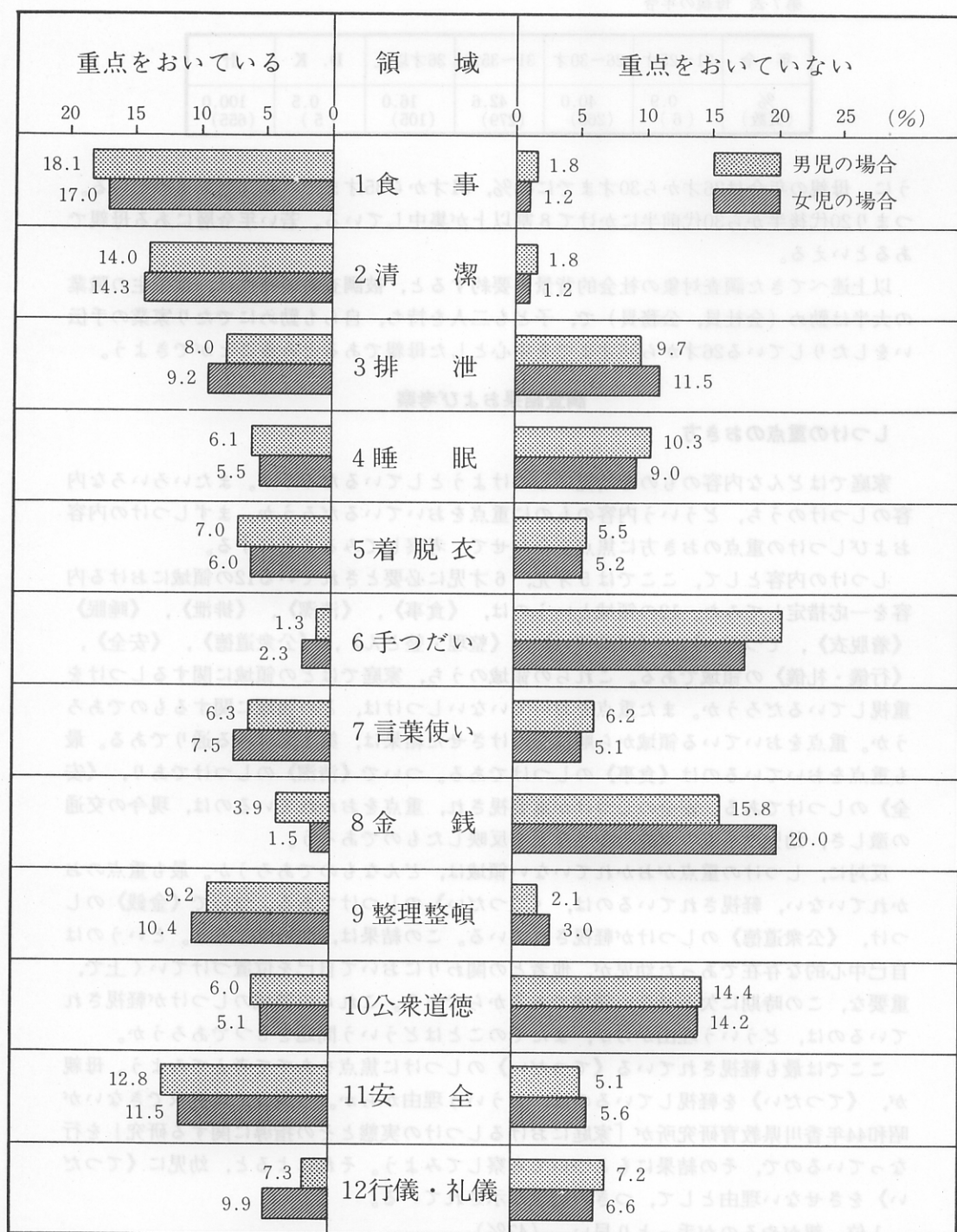
しつけの内容として、ここでは5才児、6才児に必要とされている12の領域における内容を一応措定してみた。12の領域というのは、《食事》、《清潔》、《排泄》、《睡眠》、《着脱衣》、《てつだい》、《言葉使い》、《整理・整頓》、《公衆道徳》、《安全》、《行儀・礼儀》の領域である。これらの領域のうち、家庭ではどの領域に関するしつけを重視しているだろうか。また重点をおいていないしつけは、どの領域に関するものであろうか。重点をおいている領域から順位をつけさせた結果は、第1図にみる通りである。最も重点をおいているのは《食事》のしつけである。ついで《清潔》のしつけであり、《安全》のしつけである。安全のしつけが重要視され、重点をおかれているのは、現今の交通の激しさ、幼児の不慮の事故の多さなどを反映したものであろう。

反対に、しつけの重点がおかれていない領域は、どんなものであろうか。最も重点がおかれていない、軽視されているのは、《てつだい》のしつけである。ついで《金銭》のしつけ、《公衆道徳》のしつけが軽視されている。この結果は、問題となろう。というのは自己中心的な存在であった幼児が、他者との関わりにおいて自己を位置づけていく上で、重要な、この時期に欠かせない領域であるからである。これらの領域のしつけが軽視されているのは、どういう理由からか、またそのことはどういう問題をもつてあろうか。

ここでは最も軽視されている《てつだい》のしつけに焦点をあてて考えてみよう。母親が、《てつだい》を軽視しているのは、どういう理由からか。本調査では追求できないが昭和44年香川県教育研究所が「家庭におけるしつけの実態とその指導に関する研究」を行っているので、その結果にもとづいて考察してみよう。それによると、幼児に《てつだい》をさせない理由として、つぎの結果が示されている。

1 位 親がやるのが手っとり早い。(47%)

第1図 家庭でのしつけの重点のおき方



2位 勉強させたいので、手伝いをさせない。(28%)

3位 手伝わせる仕事を決めていない(24%)

となっている。

この結果からみると、《てつだい》のもつ教育的意義についての認識のなさから、《てつだい》についてのしつけは軽視されている、と思わざるをえない。「親がやるのが手っとり早い」からというのは、子どもにてつだいをさせるとするのは親の労働を軽減させるものとのみ考えられていないだろうか。また「勉強させたいので手伝いをさせない」というのは、あまりにも知的教育のみに偏重されすぎているのか。家庭勉強はあるが家庭教育はないといえないだろうか。《てつだい》のもつ教育的意義は、勉強と同等の意義をもつものである。子どもにてつだいをさせるということは、家族の一成員として、全体の仕事のうちできる仕事を分担させることである。これは、親の労働を軽減させるというよりも、その仕事に伴う責任をもたせ、その仕事に対する権利を与えてやることを意味している。そしてこの仕事を通して、子どもに家族のなかの一成員としての自覚を、または自分が責任をはたさなかったら、他の人々がどんなに困るかということを通して、自己の存在意義を知らしめたり、責任感や連帯感や成就感などを養う機能をもつものである。てつだいに限らず、金銭、公衆道徳のしつけも、5、6才児ごろから重点をおいてしつけなければ、いつまでも『自己中心的で他律的な』状態から脱せられないであろう。

この重点のおき方は、子どもの男女別による違いにも、子どもの年令別による違いにも、また幼稚園群と保育所群との違いにも、関係なしに見らるる共通の傾向であった。つまり5才児、6才児の子どもを持つ母親は、《食事のしつけ》、《清潔のしつけ》、《安全のしつけ》には重点をおいてしつけているが、《てつだい》、《金銭》、《公衆道徳》の領域に関するしつけはあまり重要視していない傾向がうかがえるのである。

家庭でしつける領域と幼稚園（保育所）でしつける領域

ところで、これら12の基本的生活習慣に関する領域のうち、家庭で重点をおいている領域と重点をおいていない領域との間に顕著な差がみられるのは、つぎの事情の反映であるうか。これらの基本的生活習慣は元来家庭でしつけられてきた。しかし現代社会では事情がかわりつつある。核家族化や地域社会のゲゼルシャフト化による家族の社会的孤立化の進展と、それと共に、幼稚園、保育所の普及、および親のしつけに対する自信や時間的余裕のなさなどを背景として、幼児のしつけを担う機関は家庭だけでなくってきている。つまり幼稚園、保育所が幼児のしつけを担う機関として重要な機能を果たようになってきている。特に保育所の場合には、家庭以上の重要な役割を幼児のしつけにおいて担っている時さえある。現代において幼児のしつけを担う機関は、家庭と幼稚園・保育所の二大制度があるとみていいであろう。

この事情を背景として、家庭で重点をおいてしつけていない領域は幼稚園、保育所でしつけてもらった方がいいと考え、幼稚園・保育所がそれらの領域のしつけに重点をおいていれば、問題はそれほどないであろう。

母親はこれら12の基本的生活習慣の領域のうち、家庭でしつける方がいいとする領域はどのようなもので、幼稚園、保育所でしつける方がいいとする領域はどのようなもの、と考えているであろうか。第8表がその結果である。子どもの性別にも関係なく、家庭でしつけ

の方がいいとするのは、《食事》、《排泄》、《睡眠》、《着脱衣》、《てつだい》、《金銭》のしつけにおいては、圧倒的に多い。それに対して、《言葉使い》、《公衆道德》、《安全》、《行儀・礼儀》についてのしつけは、幼稚園・保育所でやってもらった方がいいとしている。つまり、基本的生活習慣のうち身体的個人的なものは、家庭でしつける方がいいとするものが多く、対人的社会的なものは幼稚園、保育所でしつけてもらった方がいいとしている。母親の側では、家庭でしつける領域と幼稚園、保育所でしつける領域とに分化しつつあるといえる。

第8表 家庭でしつける方がいいか、園でしつける方がいいか。

領域	食 事	清 潔	排 泄	睡 眠	着 脱 衣	手 つ だ い	言 葉 使 い	金 銭	整 理 整 頓	公 衆 道 徳	安 全	行 儀 ・ 礼 儀
家庭でしつける方がいい	11.7	9.1	11.5	12.4	12.5	11.3	4.3	9.6	6.8	2.1	3.2	5.5
園でしつける方がいい	2.3	7.2	2.0	1.1	0.9	2.9	16.8	3.6	9.9	22.5	17.5	13.3

ところで、この考え方は家庭における現実のしつけの重点のおき方とうまく対応しているであろうか。家庭で最も重視していない領域は、さきにみたように、《てつだい》のしつけ、《金銭》のしつけであった。ところがこれらの領域は、幼稚園、保育所でしつけてもらうよりも、家庭でしつけた方がいいと考えているのである。家庭でしつけた方がいいとしながら、実際には家庭のしつけで最も軽視されているのはなぜか。この二つの領域は、家庭でも幼稚園、保育所でもしつけなくてもいいとでも考えているのだろうか。一つの大きな問題であろう。

家庭でのしつけと園でのしつけとの間のズレ

家庭でのしつけと幼稚園、保育所でのしつけとの間にズレが生じることはないであろうか。ズレが生じる場合があるとすれば、それはどの領域においてか。第9表にみるように、ズレの大きいのは、《公衆道德》と《言葉使い》の領域においてである。《公衆道德》の

第9表 家庭でのしつけと園でのしつけの間のズレ（ズレの頻度）

領域	食 事	清 潔	排 泄	睡 眠	着 脱 衣	手 つ だ い	言 葉 使 い	金 銭	整 理 整 頓	公 衆 道 徳	安 全	行 儀 ・ 礼 儀
幼稚園群	4.2	1.4	1.4	7.0	1.4	2.8	26.9	8.5	4.2	24.0	7.0	11.2
保育所群	7.8	3.1	1.6	4.7	6.3	12.5	15.6	7.8	3.1	25.0	0	12.5

領域において、家庭でのしつけと幼稚園、保育所のしつけとの間にズレがあると感じているのは、幼稚園群（24.0%）も保育所群（25.0%）も共に多い。幼稚園群も保育所群も共通にズレを感じている領域である。それに対して《言葉使い》についてのズレがあるとするのは、幼稚園群（26.9%）の方が保育所群（15.5%）よりもかなり多い。幼稚園群の方が《言葉使い》のしつけでズレを多く感じているのはなぜか。幼稚園群の「おりんご」、「おごはん」、「おままごと」といったように何んでも「お」をつけたがる傾向のある言葉使いからみたズレであろうか。あるいは例えば流行語について、教師は一つの流行としてとらえ、母親は言葉が悪くなったとして神経質にとらえる傾向のあることの反映であろうか。さらに詳細な分析検討の必要な問題である。

幼児のできる生活習慣の実態

家庭ではどんなしつけに重点をおいているか、どのような領域のしつけを幼稚園・保育所にまかせようとしているか、どのような領域のしつけにおいて家庭と幼稚園・保育所との間にズレが生じているか。これらの問題を考察してきた。こうしたしつけの実態に対して、幼児自身が現在身につけている生活習慣の実態は、どう関連しているだろうか。特に家庭でのしつけの重点のおき方と幼児の生活習慣の実態とはうまく対応しているだろうか、あるいはそれらの間にズレが生じていないだろうか。これらの問題を以下で取扱うことにする。

幼児は現在どの程度の生活習慣を身につけているだろうか。この問題からみてみよう。しつけに関する12の領域に対応させて、50の具体的な行動内容をあげ、それらの一つ一つが「よくできる」か「よくできない」かをたずねてみた。領域別にみると、第10表にみるように、幼児の8割以上がよくできる領域は、《着脱衣》、《安全》、《排泄》である。7割以上の幼児ができていいる領域は、《金銭》、《公衆道徳》、《睡眠》、《食事》の領域である。これらの領域においては、殆んどどの幼児が基本的な生活習慣を身につけている。

第10表 幼児のできる行動領域

領 域	できる	できない	わからない
食 事	73.5	22.8	1.6
清 潔	68.3	25.4	2.2
排 泄	84.5	11.1	2.7
睡 眠	76.9	18.7	2.9
着 脱 衣	93.5	3.5	1.3
てつだい	53.5	33.6	10.5
言葉使い	48.8	37.6	11.6
金 銭	79.0	14.0	4.6
整理整頓	37.4	53.3	6.9
公衆道徳	78.1	9.9	9.5
安 全	85.5	5.4	6.4
行儀礼儀	65.1	16.5	14.9

それに対して、《整理・整頓》においては53.3%、《言葉使い》においては37.6%、《てつだい》においては33.6%の幼児ができないとしている。これら三領域における生活習慣は、5、6才児の幼児にとって、最も身につけにくいものであるらしい。具体的にはどのような行動ができないのであろうか。第11表にみるように、具体的行動内容をあげてみると、つぎのようになる。《整理・整頓》の領域においては、具体的には「人が使ったものでもしまえる」、「脱いだくつはきちんとそろえる」、「道具やおもちゃはきちんとしまっておく」といった行動である。これらの行動をま

だよくできない幼児が半数いるのである。また《言葉使い》の領域においては、「目上の人に対して正しいことば使いができる」、「悪い流行語など使わない」といった行動ができない幼児が半数以上いる。《てつだい》の領域でよくできない行動としては、「留守番がひとりでできる」、「おてつだいで分担がきめられた所はちゃんとする」などがあげられる。こうした行動がまだうまくできないでいる。

第11表 幼児のできる行動内容

領域	具 体 的 な 行 動 内 容	で き る			で き な い		
		5才	6才	計	5才	6才	計
食 事	1 食事前によく手を洗う。	87	91	90	9	5	6
	2 「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつができる。	91	87	88	8	10	9
	3 なんでもすききらいなく食べる。	38	33	34	58	64	62
	4 こぼさないで食べる。	64	68	66	34	27	30
	5 本や雑誌を見ながら食べない。	88	89	89	8	6	6
清 潔	6 外から帰ったら手足を洗う。	62	60	60	31	31	32
	7 進んで瓜を切ってもらう。	70	65	65	25	28	29
	8 ハンカチチリ紙を忘れずに身につける。	78	71	77	18	16	17
	9 瓜をかんだり、指をしゃぶったりしない。	67	75	71	28	20	24
排 泄	10 寝る前に必ず便所に行く。	91	88	89	5	7	6
	11 ひとりで便所に行ける。	93	93	93	6	5	6
	12 よごさないでできる	93	90	92	5	5	5
	13 便所からでてきたら必ず手を洗う。	83	82	82	12	11	11
	14 身なりを整えてから便所から出る。	62	69	67	33	25	27
睡 眠	15 ひとりで寝られる。	78	82	82	15	15	17
	16 きまった時間に床につく。	57	65	61	36	25	30
	17 ねまきにきがえて寝る。	95	94	94	4	4	4
	18 寝て本を読まない。	75	68	71	22	26	24
着 脱 衣	19 ボタンはひとりでかけられる。	87	92	90	8	5	6
	20 簡単な衣服はひとりで脱い り着たりできる。	98	98	97	1	0	1
てだ つい	21 留守番がひとりでできる。	55	60	57	37	33	34
	22 おてつだいで分担をきめられた所はちゃんとする。	44	52	50	40	31	33
言使 葉い	23 目上の人に対して正しいことば使いができる。	24	29	28	58	54	55
	24 赤ちゃんことばを使わない。	81	84	83	13	9	10
	25 悪い流行語など使わない。	33	39	36	52	45	48
金 銭	26 よその人からものをもらったら必ず報告する。	91	92	92	5	4	4
	27 むだ使いをしない。	66	66	67	24	25	24
整整 理頓	28 お道具やおもちゃはきちんとしまっておく。	39	45	42	55	46	50
	29 使ったものは必ずもとの場所へしまっておく。	38	43	41	55	46	50
	30 脱いだくつはきちんとそろえる。	46	36	36	45	54	55
	31 人が使ったものでもしまえる。	26	34	30	63	53	57

公衆道徳	32	のりものの中で大きな声でさわがない。	82	80	81	11	11	11
	33	のりものの中をよごさない。	91	90	90	3	5	4
	34	乗り物に乗る時は降りる人が降りてから乗る。	87	84	86	3	4	4
	35	うそをいわない。	73	73	72	12	14	13
	36	つげ口をしない。	58	58	61	25	22	23
	37	先生や友だちと約束したことは守る。	75	84	79	8	3	5
安全	38	火遊びをしない。	93	93	93	5	3	4
	39	家の人や先生にとめられている所で遊ばない。	87	85	83	7	6	8
	40	交通規則を守る。	79	81	81	8	6	7
	41	見知らぬ人についていけない。	83	88	85	4	2	3
行儀礼儀	42	人に迷惑をかけたら素直にあやまる。	62	62	62	19	18	19
	43	「いらっしやい」「こんにちは」のあいさつができる。	59	53	54	30	33	34
	44	人の家のものや、よその畑のものをとったりしない。	91	92	92	3	2	2
	45	幼稚園やおつかいのいきかえりに道草をしない。	79	73	78	11	13	11
	46	外でものを食べながら歩かない。	63	56	60	25	27	27
	47	ボールがよその家にはいったらことわってとる。	32	40	35	15	20	19
	48	人の遊びのじゃまをしない。	60	65	64	18	12	14
	49	はいってはいけない所へはいらない。	76	80	78	10	6	6
	50	友だちにいじわるをしない。	57	67	63	22	13	17

ところで、これら具体的な行動50のうち、幼児ができる行動の数はどのくらいであろうか。10～19, 20～29, 30～39, 40～50に区分して、どのくらいの行動ができるかをみることにした。性別にしてみると、40～50の行動ができるのは、男児27.9%, 女児36.4%, 30～39の間に入るのは殆んど差がなく、男児48.2%, 女児48.9%, 20～29の間のもは男児18.5%, 女児11.3%であり、19以下の行動しかできないものは男児1.8%, 女児1.3%である。男女差は殆んどなく、30から39までの数の行動を半数近くが身につけているといえる。年令別にみても、行動数においては、殆んど差はみられない。すなわち40～50の行動ができるのは5才児の28.4%, 6才児の34.2%, 30～39の行動ができるのが5才児の51.4%, 6才児の47.8%, 20～29の行動ができるのが5才児の16.3%, 6才児の15.4%であり、19以下の行動しかできない5才児は2.4%, 6才児は1.0%いるという結果がびきだされた。5才児ができる行動の数と6才児ができる行動の数との間に殆んど差がみられない。この結果を逆からみれば、この程度の行動は5才児でも充分できる行動であり、しつけの度合による差であると思ふことができる。40以上の行動ができる幼児と20以下の行動しかできない幼児がいるのは、5, 6才児の場合には年令によるよりも、しつけがどの程度なされたかによると思われる。ここではしつけの度合と直接関連づけられる資料がないが、この行動数を世帯主の職業によって分類してみよう。第12表のようになる。この表にみるように、幼児ができる行動の数は世帯主の職業によってかなりの相違がある。つまり、幼児の年令に関係なく、公務員の場合、幼児ができる行動の数はかなり多い。40から50の行動ができるとする幼児が47%いるし、30以上の行動ができる幼児の数は、全体の93.8%である。それに対して、商業の場合、30以下の行動ができる幼児は62%しかいない。公務員

と商業とをくらべると、その差は31.8%である。職業別によって、幼児ができる行動の数は、かなりはっきりした相違がみられる。公務員、会社員、サービス業の場合、幼児ができる行動の数は多くなり、商業、農業の場合は、少なくなっている。この傾向は、何に起因するものであろうか。母親の仕事内容はさきにみたように、全体に忙しい状況にあったのであるが、就中商業、農業の場合、家業におわれて幼児のしつけをする余裕がないため、他の職業と比較した時、幼児ができる行動数は少なくなっているのではないだろうか。また会社員の場合でも、10から19までの行動しかできない幼児が1割近くいることなどは、母親も勤めにでている共稼ぎの家庭である。したがって、幼児がどの程度の行動ができるかは、年令の違いとか性別の違いとかによるよりも、職業（もっといえば母親がどんな仕事に従事しているか）によって強い規定を受けているといえる。

第12表 幼児のできる行動数と世帯主の職業

職業 \ 行動数	10～19	20～29	30～39	40～50
農 業	3.7%	20.7%	39.0%	36.6%
商 業	3.4%	34.6%	42.3%	19.7%
会社員	9.9%	11.4%	48.9%	29.8%
公務員	5.5%	0.7%	46.0%	47.8%
サービス業	0%	10.8%	60.7%	28.5%
その他	2.0%	23.0%	50.6%	24.4%

しつけの重点のおき方と幼児の行動現実

最後に、家庭で重点をおいてしつけている領域と幼児が実際にできる行動の領域とを比較してみよう。両者はどのような関連があるであろうか。比較の結果は、第13表である。これにみるように、幼児が実際にできない領域に重点をおいてしつけている。二三例外の領域がある。それは《安全》、《排泄》、《言葉使い》、《てつだい》の領域である。《安全》、《排泄》は、幼児ができる行動領域の上位6位にあるのに、家庭では重点をおいてしつけている。《安全》は、さきにもちょっとふれたように、幼児の生命に関わる領域であり、《排泄》は、しつけの領域のうちで最も基本的な領域であるから、重点をおいてもおきすぎるといことがない。だから、幼児ができる行動領域にもかかわらず、重点をおいてしつけているのであろう。ところが、《言葉使い》と《てつだい》に関しては、事情は逆になっている。幼児が実際にできない領域であるにもかかわらず、しつけにおいても重視していない。《言葉使い》の領域は、家庭でのしつけと幼稚園、保育所でのしつけとの間に生じるズレの最も大きかった領域である。《てつだい》の領域は、家庭でしつける方がいいとしながら、家庭でのしつけにおいては軽視されていた領域である。この二つの領域におけるしつけをどうするか。これが幼児期におけるしつけの最大の問題の一つであろう。

第13表 重点のおき方と幼児の行動現実

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	順位
《てつだい》	金 銭	睡 眠	公衆道徳	着脱衣	《言葉使い》	《排泄》	行儀・礼儀	整理・整頓	《安全》	清 潔	食 事	重点のしつけのおき方
整理整頓	《言葉使い》	《てつだい》	行儀・礼儀	清 潔	食 事	睡 眠	金 銭	公衆道徳	《排泄》	《安全》	着脱衣	幼児の行動

高松短期大学研究紀要

第 2 号

昭和47年3月1日印刷

昭和47年3月1日発行

編集発行 高松短期大学

高松市春日町

印刷 新日本印刷株式会社

高松市木太町2158